

INTERVIEW



千厩高
囲碁将棋同好会
千葉ひとみさん
Chiba Hitomi

小、中学校はソフトボールをしていました。高校は囲碁将棋と器楽、二つの同好会を掛け持ちしています。これまでの成績は個人戦で入賞2回、団体戦で優勝1回です。全国高文祭への出場が決まったときは本当にうれしかったし、上位に入賞できて最高の思い出になりました。



千厩高
囲碁将棋同好会顧問
菅野幸輝さん
Kanno Kouki

ひとみさんは、高校から将棋を始め、しかも少ない練習時間にもかかわらず、どんどん力をつけました。彼女の持ち味である攻め続ける将棋には勢いがあり、見ていて気持ちがいいです。

極める技、光る集中力 攻めの将棋で全国5位

千厩高囲碁将棋同好会

千葉ひとみさん

大舞台にも気負いなし

持ち味の勝負強さと攻め続ける将棋で
全国の強豪を撃破

Information

全国高校総合文化祭群馬大会
将棋部門
開催地 前橋市
会場 群馬県生涯学習センター
期間 8月6～7日
出場 31チーム



「日本将棋」「本将棋」、歴史的には「小将棋」ともいわれる将棋は、盤上遊戯の一種。古代インドのチャトランガが起源と考えられており、世界中で盛んなチェス、中国で盛んなシャンチーに次いで競技人口も多い。

このうち日本で普及している将棋は本将棋。持ち駒に觀念があるなど、諸外国の類似ゲームには例のない独特のルールが特徴だ。

将棋は高度な知的ゲームであると同時に、人間同士の頭脳がぶつかりあう勝負でもある。だから戦う理由も、将棋の真理を究めたいという学究的な志もあれば、純粹に相手に勝ちたい闘争心や名誉欲もある。名人戦と呼ばれるプロの舞台ともなれば、もはやゲームの域を超えた長い戦いが繰り広げられる。そこには、聖域ともいえる独特の緊張感と雰囲気がある。

千厩高囲碁将棋同好会に所属する千葉ひとみさん(二年)は「黄海字古堂」。兄が指す姿を見て高一から始めた。

将棋のおもしろさを「一手一手打ったに集中力が高まる」ところです」と語るひとみさん。「相手に攻められる前に攻め切つてしまえます」と迷いが無い。

指導する顧問の菅野幸輝教諭は「昨年の新人大会も全国大会に出場している実力派です。女子部員が少ないために、普段は男子を相手に練習しています。持ち味は、集中力とハラハラするほど思い切りのいい攻め。本番での勢いと勝負強さは抜きんでいますね」と評価する。

前橋市で八月六、七の両日行われた将棋部門の女子団体戦は三人一組で対戦。千厩高校は予選から堂々の試合運びで次々と強豪を撃破、チームは見事全国五位に入賞した。

初めての全国高総文祭。だが、気負いはなかった。大舞台であろうとも、どんなに強い相手であろうとも、周囲の憶測や雑音を二顧だにせず、強気の攻めを貫いた。その姿は、まるで将棋の魅力や奥深さを楽しむことにひたすら集中しているかのようにさえ見える。ひとみさんにとって勝敗は、その延長線上にある結果にすぎないのかもしれない。

「全部で六試合戦いました。いつも最高の一手で勝ちたいから、とにかく攻め続けました。決勝トーナメント二回戦で、優勝した南山高女子部(愛知)に負けましたが悔いはありません。攻めること、それが自分の将棋だし、そこが一番楽しいと思うから」

淡々と語る十八歳の勝負師は、二学期からは、(掛け持ちしている)器楽同好会の活動も頑張らないと」と屈託のない笑顔を見せた。

*予選1回戦～4回戦と決勝トーナメント1回戦～2回戦で計6試合となる

攻めの将棋で全国5位に入賞した千葉ひとみさん。(全国高総文祭本番の撮影が禁止されているため千厩高で撮影)

高校文化の祭典に 藤沢町から 4人の高校生出場



第32回全国高等学校総合文化祭群馬大会「ぐんま総文」(文部科学省、全国高文連、群馬県など主催)は、8月6日から10日まで群馬県内11市町を会場に開かれた。全国高総文祭は全国47都道府県の代表2万人が日ごろ鍛えた文化の技を競う「文化のインターハイ」。囲碁・将棋、日本音楽、演劇、合唱、吹奏楽など24部門で、コンテストや発表会が行われた。この高校文化の祭典に岩手県代表として将棋と日本音楽の2部門に本町から4人の高校生が出場。日ごろの練習の成果を発揮して、大舞台で最高のパフォーマンスを披露した。

INTERVIEW



千厩高箏曲部副部長
星 律子さん
Hoshi Ritsuko

中学時代はソフトボールをやっていました。高校の体験入学の時、先輩たちの演奏を聴いて魅力を感じ入部しました。部活動以外にも家で練習しました。箏の一番のだいご味は、息の合った演奏ができた時。全国の舞台で納得できる演奏ができてうれしかったです。



千厩高箏曲部
熊谷真美さん
Kumagai Mami

小学校はマーチング、中学校は卓球部に所属していました。箏を始めたきっかけは日本音楽にふれてみたかったからです。他の弦楽器では出せない音が出せるところが箏の魅力です。全国の舞台で最高の演奏ができてよかったです。



千厩高箏曲部
首藤恵利さん
Shuto Eri

中学時代はテニス部でした。部活動を見学していた時に、先輩たちが奏でた音に感動し、自分もやってみたくて入部しました。みんなで心を一つにして息のあった演奏ができたときはとてもうれしいです。これからも先輩たちに続けるよう頑張ります。



千厩高箏曲部顧問
千葉いつ子教諭
Chiba Itsuko

高校入学から箏を始めた生徒たちが、ここまで演奏できるようになったことに驚いています。子どもたちの学ぶ力、上達する力は本当にすごいですね。半年以上かけて練習してきた曲を全国高総文祭という最高の舞台で楽しく演奏できて本当にうれしいです。



息のあった演奏を披露する千厩高箏曲部。前列左から2人目が首藤恵利さん、3人目が熊谷真美さん、4人目が星律子さん（全国高総文祭本番の撮影が禁止されているため千厩高で撮影）

千厩高箏曲部

星 律子さん
熊谷真美さん
首藤恵利さん

副部長として同部をまとめる星律子さん（三年）は「徳田字平田」は「体験入学の時、先輩たちの演奏を聴いて感動し入部しました」と振り返る。熊谷真美さん（二年）は「黄海字西深萱」は「他の弦楽器では出せない音が箏の魅力」と、首藤恵利さん（一年）は「大籠字右名沢」は「全員が心を一つにして演奏できた時は本当にうれしい」と、箏の魅力語る。三人とも心に響く和の音色に魅せられ箏を始めた。

高演奏技術はもとより一音一音、一曲一曲に込められた一人一人の「心」が、全国高総文祭という最高の舞台での最高の演奏につながったようだ。

をつけてきた。同校箏曲部の全国高総文祭出場は初めて。昨秋開かれた岩手県大会で、全国トップクラスの盛岡二高に次ぐ好成績で、推薦を受けた。今回演奏した曲は吉崎克彦氏作曲の「オーロラ」。比較的アップテンポだが曲調は実に優雅だ。箏のほか、三味線と（尺八の代わりとなる）フルートで構成されるいわば現代の「三曲」。美しさに加え、迫力満点の演奏は、ため息が出るほどだ。

太田市新田文化会館で八月八、九の両日開かれた「日本音楽」部門には全国から五十七団体が出場。この大舞台で千厩高は、息のあった見事な演奏で会場を埋めた大勢の聴衆を魅了した。指導する千葉いつ子教諭は「箏だけで演奏する学校が多い中、三味線とフルートを加えたオリジナルサウンドで演奏しました。今回演奏したオーロラという曲は半年以上かけて練習してきた自信作。本番では息もぴったりで最高の演奏ができました」と言葉を弾ませる。箏には一般的な十三絃と低音の十七絃がある。その基本となる一の絃を「仁」という。「仁」には「核」とか「中心」という意味があり、音を紡ぐその行為は、自分の心に向かって奏でるという意味もある。

一人一人が奏でる箏の音色は実に美しく、まさに日本人の琴線を刺激する和の響きと言いたくなるほど心地よい。箏曲は箏の音楽で、近世に発達した俗箏による音楽を指す場合が多い。ルーツは室町末期に大成された筑紫流箏曲の流れをくむ八橋検校が、江戸初期に八橋流を創始、大きく生田流箏曲と山田流

箏曲とに分かれている。三種の楽器で演奏する三曲のひとつでもある。また、よく合奏される地歌も含めた音楽ジャンルとみなされる場合もある。県立千厩高箏曲部は、千厩高と千厩東高が統合した〇二年に発足、部員は二十人だ。まだ歴史は浅いが、外部講師を依頼して本格的な練習を重ねるなど、近年メキメキ力

琴線を刺激する箏曲 迫力の演奏で魅了

日本人の琴線を刺激する
美しい和の音色
心一つに奏でる演奏で
全国に名を馳せる

Information
全国高校総合文化祭群馬大会
日本音楽部門
開催地 太田市
会場 太田市新田文化会館
期間 8月8～9日
出場 57チーム

